

～シンガポール便り～

vol. 1

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



シンガポールに新たに事務所を開設することになり、8月8日に当地に赴任しました。

これまで「ロスアンゼルス便り」を連載しておられたロスアンゼルス事務所の河野所長から引き継いで、今月から「シンガポール便り」をお送りしますのでよろしくお願ひいたします。

〔シンガポールの第一印象〕

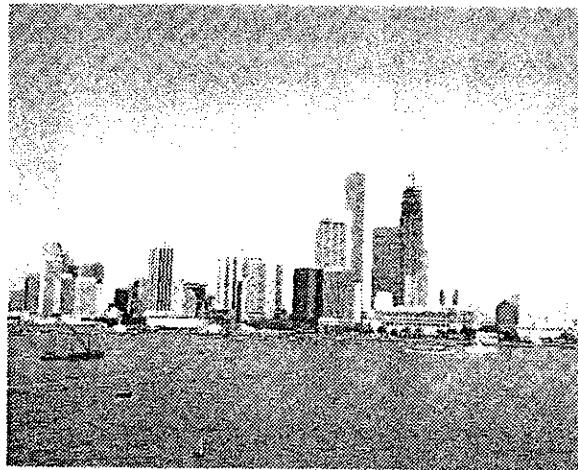
さて、皆さんはシンガポールについてどのような知識をお持ちでしょうか。私自身は、この3月末にシンガポール広島事務所駐在の内示を受けるまで、東南アジアで比較的経済が発展していてNIESの仲間入りをしている国という程度の知識しかありませんでした。

その後あわてて本を読み、国民一人当たりのGNPが10,450US\$（日本は23,730US\$）で、東南アジアの他の国、マレーシアの2,130US\$、タイの1,170US\$、インドネシアの490US\$などに比べて著しく高い（いずれも1989年）といったデータや歴史などは勉強しましたが、本当に驚いたのは5月に事務所の開設調査のために実際にシンガポールを訪れたときのことです。

香港、タイ、マレーシア、インドネシアにそれぞれ1日ずつ滞在した後でシンガポールに入ったのですが、4日間の滞在で受けた印象は、一言でいえば、東南アジア地域にはめ込まれた先進国の大都会というものです。（先進国という言葉にはいろいろな印象があるかも知れませんが、ここでは単に経済的に発展しているという意味です。）

世界一機能的との評価のある近代的な大空港、空港から都心に続くきれいな並木の高速道路、70数階建ての高層ビルなどが林立する都心、国中に計画的に建設された高層の大住宅団地と整備された道路網、安心して飲める水、いずれも東南アジアの他の国とはかなり異なった印象です。

シンガポール島は、北緯1度



～シンガポール便り～

の赤道直下にあり、東西42キロ、南北23キロ、面積 617平方キロで広島市よりも2割弱狭く、最高地点はブキティマ山の 177メートルという小さくて平らな島であり、そこに高度な機能が集積された都市国家です。人口は 269万人（1989年）ですから、広島市よりやや狭い地域に、広島県全体の人口が納まっている国というイメージでお考えいただければよいでしょう。そのような小さな国が世界経済の中でかなりの役割を果たしており、そこに住んでいる人々は、平均的に言って、周囲の国々に比べ経済的にかなり高水準の生活を営んでいます。

周囲の国々を見た上でこの国に来ると「豊かさ」の意味について色々と考えさせられますが、これについては次回以降に改めて書いてみたいと思います。

〔家族について〕

8月8日の赴任の際には家族も一緒にきました。妻と小学校4年生の長女と1年生の長男の4人家族です。これからこの国で家族と私が経験していく色々なことを、県職員としての目を通して考え皆さんにお伝えし、あるいは御意見をお聞かせいただきながらこの欄を進めていきたいと考えています。



〔事務所の設置について〕

順番が逆になりましたが、最後に、事務所の設置について背景なり概要を簡単に説明します。

この事務所は、広島県が単独で設置したものではなく、県内の各市、各商工会議所と共同で設置したものです。この点では、ロスアンゼルス広島事務所と同じなのですが、設置母体がロス事務所の場合は広島県商工会議所連合会であるのに対して、当事務所の場合は新たに設立された広島県アジア経済交流協議会となっています。この協議会は、アジア地域における県内産業の国際的展開の支援が重要になるとの観点から設立されたものであり、将来的にはロス事務所を含めた海外事務所の一元的展開をめざしています。

事務所の主な業務は、県内企業の東南アジアでの活動支援など東南アジアと広島県との経済交流の促進、新空港やアジア競技大会のPRなどその他幅広い交流の促進といったものです。事務所は県から派遣された私一人だけであり、郊外の工業団地の一画にある株日本メディカルサプライ（本社広島市）のシンガポール工場内の一室を間借りしています。

事務所についてのお問い合わせなどは、商政課経済交流係内の広島県アジア経済交流協議会までお願ひいたします。

～シンガポール便り～

vol.2

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



当地に赴任して2か月近くが過ぎようとしています。予想していた以上に多忙な毎日ですが、そんな中で感じていることをいくつかお伝えしてみます。

〔豊かさについて〕

シンガポールを形容する言葉は、クリーン＆グリーンの公園都市などいくつもありますが、私としては「裏通りの安心感」をあげたいと思います。前回も少し触れましたが、この国に来ての一番の感動がこの「豊かさ」から生まれる「裏通りの安心感」です。東南アジア各国とも首都の表通りは外国人にとっても違和感のない近代都市ですが、それはいわば外国人とその国の人達のための特別な世界であり、それがその国の社会の実相を表している訳ではありません。もちろんシンガポールとてみんなが豊かな訳ではなく学歴差などによるかなりの所得格差がありますが、社会の重心というか平均的なレベルがどこにあるかという点において東南アジアの他の国々と大きく異なっています。このことはいわゆる「外国人専用」の施設があまりないという言い方でも表せるのではないかと思います。ホテルにしてもデパートにしてもレストランにしてもどこも地元のシンガポーリアンでにぎわっています。

社会における豊かさの格差があまりに大きいと、多くの人々はその社会のシステムを信じることができず、どんなに懸命に努力しても一生チャンスが回ってこないと感じてしまいます。そのような社会においては、人々はあきらめてしまうかあるいは自分だけでも何とかと思うようになるのではないかでしょうか。それが社会の安定感の問題につながるような気がしています。

シンガポールで生活してみて感じる居心地の良さの原因の一つは平均的なシンガポーリアンの生活レベルの高さから来るある種の余裕といったものが社会にあるからではないかと思います。

物質的な豊かさの尺度が人々の幸せの尺度とはならないことは理解できても、シンガポーリアンの自信と明るさに満ちた表情を見ていると豊かさの価値というものを改めて感じさせられるとともに、日本の豊かさの中にいてその意味を十分に感じていただろうかと振り返るようになります。



〔中心部のショッピングセンター〕

～シンガポール便り～

〔多民族の国〕

2か月近く仕事をし生活をしている中で、本当に外国にいるのだろうかと思うことがしばしばあります。それほどシンガポールは私にとって違和感のない国です。その主な理由は、中国系が多数を占めることから外見の違いから生じる疎外感を感じることが少なく、また先程述べたように先進国なみの豊かさを実現していることから生活レベルの違いによって生じる根拠のない優越感や劣等感を持つ危険が少ないなど、心理的障壁が少ないとあるのだと感じています。

ただその中で強烈にこの国の特徴だと感じるのは、若く強力な政府の存在と多民族社会だという点です。政府についてはもう少し勉強したのちに触れてみたいと思っています。もう一点の多民族社会という点についても、実際に理解が深まれば民族間の感情的な問題など底流にあるいろいろな面が見えてくるのだとは思いますが、少なくとも表面的には中国系76%，マレー系15%，インド系7%やその他の欧米系など、様々な人々が互いに少しずつ譲り合いながらあるいは尊重し合いながら一つの国の中で暮らしっています。

この国では世界を感じることができます。

いろいろな民族がそれぞれの宗教、風俗、習慣を守りながらもシンガポーリアンとして一つの国をつくりあげている。そのような多様性への理解力、許容力といったものこそが、私達が

「国際化」の中で世界と付き合っていくために最も必要となるものであり、この国はそのような素直な国際感覚を学ぶのに最適な国ではないかと思っています。

〔英語について〕

既に英語が得意あるいは好きだという人には関係ないかと思いますが、この国の良さの一つは「語学」としての英語ではなくコミュニケーションの道具としての英語が実感できる点ではないかと思います。

学生時代から英語が嫌いで、4年前に民間企業派遣研修で1年間伊藤忠商事に派遣された際に初めて道具としての英語の意義を感じて勉強を始めた私にとって、多民族が共通の意思疎通手段として英語を使用しているこの国は実際に仕事において英語を使う場としてはなじみやすく、中国系英語とでもいうシングリッシュの世界で結構楽しくやっています。いかに話すかよりも何を話すかが重要などといって英語が下手なことを言い訳するのもいつまでもはできないと思いながら、冷汗をかきつつやっています。「英語」についてはまた改めて触れてみたいと思います。



〔郊外の住宅団地のショッピングセンター〕

～シンガポール便り～

Vol.3



シンガポール広島事務所長 橋本 康男

シンガポールにきて2か月半、やっとピザもとれ屋台の食事にも慣れて、少しはシンガポーリアンらしくなってきたかなと思っているところです。

今回は事務所の一日を御紹介したいと思います。

〔事務所の一日〕

9:00 懸案事項の確認、整理。

在シンガポールの広島関係企業の社長さんに、先日広島FM来星（星＝シンガポール）時にインタビューに協力していただいたお礼の電話。

9:30 本日最初の訪問先に出発。

10:00 SBC（シンガポール放送）訪問。

SBCは日本のNHKのようなものだが民間TV放送局のないこの国では独占的な地位を占めている。コマーシャルを流しているのが意外。訪問の目的は、アジア大会の伝隊のシンガポール訪問時に、ボッボとクックのぬいぐるみをTVに出してもらうよう交渉すること。

国際関係担当の部長のアボをとっている。先方はスポーツ担当のプロデューサー外1名が同席。協議の結果、①アジア大会自体が3年先であること、②ぬいぐるみを出演させて話を聞くような適当な番組がないこと、などからこの件の実現は困難だが、伝隊来星時に今後の進め方について改めて協議の場を持つことで合意。

11:20 広島大学への留学経験者訪問。

シンガポールから日本の大学に留学した人たちの会から紹介してもらって訪問。この方は1962年の卒業で、久しぶりの広島ということで話がはずむ。他の広島大学留学経験者の紹介をお願いして帰る。

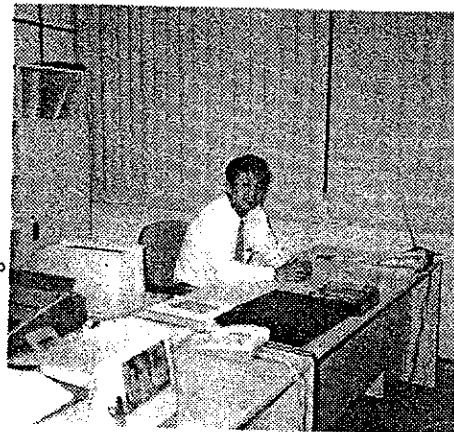
12:30 事務所着。近所のフードセンター（屋根だけある屋台の集合体）で昼食。「ミー」というラーメン風のものが1ドル50セント(120円)。市内の中心部のエアコンのきいたレストランに比べると値段も雰囲気も格段に庶民的。

13:30 午後の訪問に出発。

14:00 SMA（シンガポール製造業者協会）事務局長訪問。

SMAは商工会議所の工業版とでもいうもので、シンガポールの地場の製造業者を中心に1,000社以上の会員がいる。

この事務局長さんには、初めて訪問した際に、広島の企業からプラスチック成形をしているシンガポール企業の紹介を依頼されている話を



(シンガポール広島事務所)

—シンガポール便り—

したところ、ちょうど当日の夜にプラスチック関係企業のレセプションがあるから紹介してあげようと、御自分の車で同行していただくなど、いろいろお世話になっている。

本日の用件は、先方から提案いただいた業務協力協定の締結について広島側の組織見直しの都合で先にのばしたいということと、経済観光交流団来星時の表敬訪問の打ち合せ。表敬訪問は昼食を用意しセットしていただけたことになった。

15:30 シンガポール政府貿易発展局（TDB）訪問。

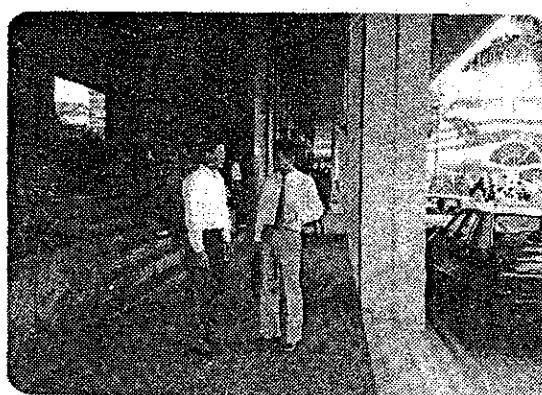
「ひろしまフェア」の打ち合せのために、TDBの女性担当官を訪問。担当官といっても自分のアシスタントを持ち広範な分野について責任を持っている。以前はシドニーの事務所に3年いたとかで、この国の女性の活躍には感心させられる。

TDBには都道府県のフェアとしては初めて共催として参加してもらっている、記者会見場の提供、空港への知事等の出迎えなどを依頼して帰る。

17:00 事務所帰着。

シンガポール日本商工会議所の新入会員紹介欄で見たという広島関係の方から電話。訪問の約束をする。

余談だが、この商工会議所の会員には規模により4ランクあり、当事務所は広島県の駐在事務所だからといって大企業と肩を並べてA会員になっている。職員1名が郊外の工業団地内の工場に間借りしている当事務所としてはいささか面映ゆい。



(シンガポールの街角にて)

17:30 事務所の終了時刻。

その日の訪問や電話の結果、確認の必要なものについては確認のレターを作成して送付し、広島側への報告の必要なものはメモを作成する。

以上、一部異なった日の活動を組合せていますが概略このようになります。訪問件数は、8月が26件、9月が34件、10月が43件です。この時期あいさつ回り等があり特に件数が多くなっていますが、平均して1日当たり2~3件は訪問している計算になります。中心部から離れた立地のために1件当たりの片道の所要時間が30分程度かかり、1日に4件訪問の日には外回りだけで昼間がつぶれます。事務所の車の走行距離は、月 2,000km（通勤含む）を超えてています。

この外に、電話応対が今のところ1日平均10本程度はあり、資料作成、事務所の経理、来客への対応等もあって、1日があっという間に過ぎてしまいます。

また、広島からの訪問者は、8月が2件延べ11人、9月が4件延べ6人、10月が7件延べ67人となっています。

今まででは「ひろしまフェア」関連の事務が相当ありましたので、事務所の開設以来息つくまもなく走ってきたという感じですが、フェアが終われば少し情報収集、提供活動等にも力を入れていきたいと考えています。

～シンガポール便り～

Vol.4

シンガポール広島事務所長 榎本 康男



11月2～5日の「ひろしまフェア」、及び11月9～17日の「ジャパンフェスティバル」のどちらも好評のうちに終わり、来星された訪問団も、無事所期の目的を達成されたものと思います。ちなみに事務所開設以来の広島からの訪問客は254人、このうち事務所を訪問された人数だけでも143人となっています。

〔産業の高度化と拠点性の確保〕

これまでの活動を通じて感じることは、日本との双方向での経済交流への期待と東南アジアの経済活動の拠点となることへの意欲です。事務所活動について当地ラジオ局の朝のニュース番組でインタビューを受けたり、地元紙に事務所の紹介記事が載ったりしましたが、いずれの場合も、関心は双方向での経済交流の促進と東南アジアの拠点としての位置付けという点にあります。

天然資源がなく、広島市程度の面積に広島県程度の人口がいるだけのこの国にとって、経済発展の成功を継続させていくためには、経済発展先進国との相互交流による産業の高度化と、周辺諸国の経済発展の中で地域の拠点としての発展を実現していくことが不可欠であり、政府もこれらの課題を明確に打ち出しています。恩恵的な交流ではなく対等な交流という点に、この国の人々の自負と次のステップへの意欲を感じられます。

〔アセアン地域地方自治体駐在員会議〕

11月下旬に、アセアン地域に立地する地方自治体事務所の駐在員会議がインドネシアで開催され、参加してきました。タイから愛知県、長野県、マレーシアから名古屋市、シンガポールから大阪府、大阪市、神奈川県、静岡県、福岡市、広島県の9構成員とオーストラリアからの愛知県、大阪府のオブザーバー参加などです。シンガポールの6事務所のうち半分の3事務所はここ2年間での設置であり、この地域での地方自治体の動きを示しています。

会議では各国の経済情勢の報告の外、事務所活動についての情報交換などが行なわれました。事務所活動、運営については各県毎に若干異なり、地方自治体の海外事務所のあり方については、まだ模索状態という段階ではないかと思います。

Hiroshima's representative office to supply 2-way info

By Schatz Lee

THE Singapore representative office of the prefecture of Hiroshima, Japan, will provide information on the region to Hiroshima-based companies wishing to establish or expand their operations here.

Similarly, local companies wanting to find out about Hiroshima may also approach the representative office, which was officially opened by the governor, Toraomichi Takemoto, yesterday.

The Singapore office is the third overseas office for the Japanese prefecture, which will host the next Asian Games in 1994. The other two offices are in Los Angeles and Seoul.

At a press conference announcing the official opening last week, the director of the commerce administration division of the Hiroshima prefectoral government said the attraction of South-east Asia lies in its competitive labour costs and availability of land. Singapore, he said, is very different. Said Yasuo Hashimoto, director of the representative office: "Singapore's labour costs are very high, but its infrastructure is very good. So only manufacturers of high-technology will be interested in setting up here."

At least one Hiroshima company in Singapore, Tri-M Technologies, which makes printed circuit boards, has moved its manufacturing to



Mr Hashimoto: local labour costs are high but infrastructure is very good

Malaysia, said Mr Hashimoto. Development Board and Trade Development Board who said there is very important to consider mutual exchange of technology and I agree.

In Hiroshima, the key industries are shipbuilding, iron and steel, car, manufacture of machine, furniture, manufacturer of batte for sports and tourism.

Apart from exchange of information, Mr Hashimoto hopes there will be technological exchange between the two port cities.

He said: "I have met officials from the Economic De-

(地元紙ビジネスタイムズの記事)

～シンガポール便り～

〔インドネシアについて〕

会議の前に土、日の休みがあったので、インドネシアに家族を連れていきました。その時の子供達の反応は「初めて外国に来た感じがした」というものです。つまり、シンガポールは経済的に豊かであり都市も整備されていて東京で暮らしているのと変わらないけれども、インドネシアに来て観光客相手の猛烈な物売りに出会い、街や村を見ることによって初めて日本とは違う世界を体験したというのです。一人当たりGNPが日本の40分の1以下、シンガポールの20分の1以下という数字はこの国的一面しか表してはいないと思いますが、それでも人々の平均的な豊かさのレベルは示しています。

もちろん「豊かさ」は安易に判断されるものではなく、「幸せ」となるともう判断を超えてしますが、少なくとも日本で平均的な生活をしていた子供達にとって、インドネシアは違う国に見えたようです。

交流というのは、経済的発展の違いを超えてなされるべきですし、経済的豊かさの違いによって無意味な偏見を持つことは避けるべきことですが、一般的な感覚としてこれがいかに難しいかも感じています。自分と異なる言葉をしゃべり、自分と異なる風俗、生活習慣を持つ人々が、自分と同じ感情を持ち、自分と想いで人生を過ごしていることを理解し受け入れること自体難しいのに、それに経済的な豊かさの違いが加わると、実際問題としてはさらに難しくなります。

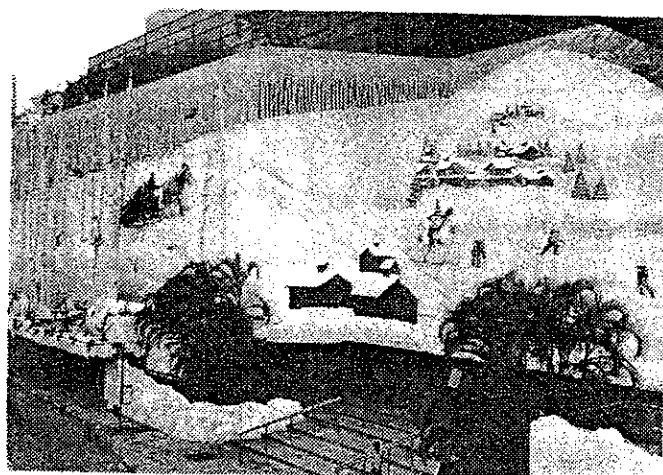
インドネシアから帰ってきて、「やっぱりシンガポールが落ち着くね」と家族で思わず口に出てしまい、これではいけないのだろうなと思うと同時に、このシンガポールでまず交流の経験を積み、それを拡げていくことがやはり必要なではと改めて感じています。

〔クリスマスについて〕

話はがらりと変わってクリスマスについてです。11月に入るとデパートやホテルなどは趣向を凝らしたクリスマスの飾り付けを始め、ライトアップをします。

12月になった今も相変わらずの暑さで休みの日にはプールのお世話になっているこの国では、サンタさんも水着で来るのではと家族で楽しみにしていたのですが、残念ながらおなじみの雪景色！に赤いガウンのサンタクロースでした。

さすがにインド人街やアラブ人街ではクリスマスの飾り付けは見かけませんが、ショッピングセンター街では商売の種は逃さない商人魂が健在です。



(クリスマスの飾り付け)

～シンガポール便り～

Vol.5

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



あけましておめでとうございます。

シンガポールは雨期で少し涼しい季節となっていますが、それでも短パン、Tシャツのお正月です。5,000km南の国から新年の御挨拶を申し上げます。

【クリスマスとお正月】

クリスマスでは随分盛り上がったこの国も、正月休みは元日だけで淡々とした年越しです。もっとも、正月が年4回もあるこの国ではその度に大騒ぎしている訳にはいかないのかもしれません。多民族の国であることから、1月1日、中国の正月（旧暦）、マレーの正月（イスラム教の祭）、インドの正月（ヒンズー教の祭）の4回とクリスマスが国民の休日となっています。

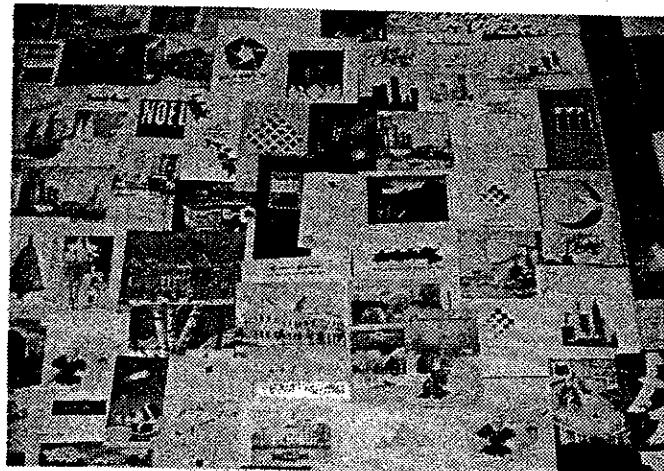
年賀状ではなくクリスマスカードの交換が一般的で、色とりどりのカードが12月の初め頃から届きだして楽しませてくれます。事務所関係のカードは、氏名、会社名等を印刷し、自筆のサインをするというのが一般的です。こちらでは、事務所経費の支払いはほとんど小切手ですし、個人的な支払いも小切手とカード中心で、この外にも事務所のレターなど全てにサインがついて回ります。

【交流など】

先日の土曜日は、子供達は日本人学校の友達の家に泊りに行き、親はシンガポールに永住を決めて家も買っている近所の日本人の家を訪問し、翌日曜日には、シンガポーリアンと結婚している日本人の家に家族で招待され、夕方にはオーストラリアから日本人家族が遊びにくるなど、今のところ日本人社会の中でのつきあいが中心です。

シンガポーリアンとのつきあいは、8月の赴任以来名刺交換をした人数は約110人（日本人は約140人）ですが、個人的なつきあいとなるとまださほど多くはありません。少しずつ機会を見つけていきたいと思っています。

なお、11月5日のインドの正月（ディーババリ）には、事務所が間借りしている工場のインド人守衛のバーラさんの家に招待されました。国民の約9割が公団住宅に住んでいるというこの国の例にもれず、HDB（住宅開発局）のアパートの中の一軒です。



（色とりどりのクリスマスカード）

—シンガポール便り—

2つの寝室と居間、台所・食堂という構成。湯ぶねがなくシャワーとトイレがセットだということを除けば日本のアパートと比べてさほど変わらない感じです。自己所有だけでも狭いので売ってもっと広いアパートを買おうと思っているとのこと。全ての所得階層の人たちへの住宅供給をめざして低価格の住宅供給を進めてきて、今では持ち家率8割を実現しているこの国の成果を実感しました。

なお、政府は公共住宅の配分に当たって、それまで各民族ごとにわかつて住んでいたのに対して、政策的に混住を進めていますが、隣近所への無関心化が進む集合住宅自身の問題もあり、その成果が出るまでにはもう少し時間がかかりそうです。
〔相互理解〕

いろいろな人に会って話をする中で、国際間の交流の難しさと興味深さを感じています。こちらに来るまで外国人との付き合いなどほとんどなかった私にとって、言葉や風俗習慣は違っても基本的には同じような考え方や感情を持っているということと、日本人における場合と同様にいろんな個人差があって「〇〇人」としてひとくくりにはしがたいというごく当たり前のことが身をもって理解できるというのは、素晴らしいまた楽しい経験です。

それと同時に、このような相互理解を進めるためには、相手との関係について歴史の分野にまでいたる理解が必要であることと、自分自身が何を言いたいのかの自覚と相手の考えを受け入れる柔軟性が大事だと感じさせられています。

歴史についていえば、以前タクシーの運転手さんから日本軍占領時期の虐殺について延々と聞かされたこともあり、そのような歴史の理解と反省とそれに基づく相互理解の重要性の認識なくしては将来にわたる付き合いは成り立たないと思っています。次に、こちらに来てよく感じるのが日本語のあいまいさです。何が言いたいのかを整理しはっきりさせておかないと、いざ英語で表現しようとする際、特に私のように下手な英語の場合には詰まってしまいます。中身や結論がはっきりしないのに言い回しでなんとなく分かったような感じになってその場しのぎをするという訳にはいかず、よい経験をしています。相互理解は、相手への尊重の念に基づく異質の考え方や風俗習慣の理解と受容から成り立つのだと思いますが、自分自身の考えをどう相手に訴えていくかも併せて重要であるように感じています。この歳になると無意識のうちに柔軟さを失ってしまいがちなだけに、すなおな気持ちで楽しみながらやっていきたいと思っています。



(インド人バーラさんの家で長女ラープラタちゃんと)

～シンガポール便り～

Vol.6

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



赤道直下の国だから波打ち際のヤシの木の下で毎日屋寝、とまではいわなくても、その生活についてはあまり具体的なイメージはお持ちではないのではないかと思います。

私自身も赴任が決まるまではシンガポールのことについてほとんど知らず、また引っ越し準備に入ってからも情報がなくて困りました。靴屋さんでは暑くて合皮の靴底では溶けてしまうといわれたり、綿製品が手に入らないとか、Yシャツは半袖しか着ないとか、Gパンなんて暑くてはかないとか、子供の運動靴や本は3年分持っていくべきだとか、今から考えるとおかしな情報が随分ありました。子供の教育も心配でしたし、治安や衛生問題など知らないが故の不安はきりがありません。こういったいわば日常生活の常識的な情報というのは案外手に入らないものです。

今回は、こちらでの生活の実際について少し御紹介してみたいと思います。

(はじめに)

一言でいってしまえば、日本の夏に暮らしているのとほとんど変わりません。それも大都会という点では、広島というよりは東京での生活のイメージに近いかも知れません。

国民の9割以上は団地住まいであり、外国人も例外ではありません。冷房完備の地下鉄が東西南北に走り、バス路線も整備されています。タクシーは完全にメーター制でありチップや料金交渉の心配はいらぬしかも格安です。治安上の不安もなく、東京で暮らす程度には安全だと思います。

(暑さについて)

確かに暑いのですが、何しろ夏しかない国ですから冷房は完備しており、むしろ冷えすぎの対策として長袖のカーディガンなどは欠かせません。また、我が家アパートは海に面しているためよく風が通り、時々しかクーラーをつけることはありません。

靴にしても合皮の靴底が溶けるということなどもちろんなく、Gパンもよく見かけます。我が家ではGパンを日本に置いてきたのですが、後で送ってもらいました。他の衣料品にしても、日本にあるものはほとんど問題なく入手可能です。



(団地国家シンガポール、手前は地下鉄の車庫)

～シンガポール便り～

ファッションについても、こんなに暑い国では工夫の余地などあまりないのでと思っていたましたが、なかなかに洗練されておりかつ大胆で目を楽しませてくれます。

(食について)

多民族の国だけあって、中国料理、マレー料理、インドネシア料理、インド料理などいろいろな料理が楽しめます。それも、一人1.5ドル(120円)で食べれる店から100ドルを超す高級レストランまで様々です。

シンガポールの良さは、東南アジアで唯一生水の飲める国ということで、フードセンターと呼ばれる屋台に近いような店で気楽に食事ができることです。

当地の日本人の中には敬遠する人もいますが、雰囲気になれてしまえば味も悪くなく格安の値段で各国料理が楽しめます。シンガポーリアンも、普段は実質重視でフードセンターで食事をし、時にはしゃれたレストランで楽しむなど上手に使い分けているようです。日本料理も、フードセンターの店から高級レストランまで幅広く、日本そばや丼もの、てんぷらなどもそこそこの値段で楽しめますし、日系のデパートへ行けば驚くほど豊富に日本食が手に入ります。もちろん割高ですが、広島菜漬、おたふくソース、納豆からわさびやアジの開きに至るまで日本にあるものでこちらで手に入らないものはほとんどありません。我が家では、家庭ではもっぱら日本食で、外では割高な日本食を敬遠して当地の料理を楽しむというように使い分けています。ローカルのスーパーを含めても全体として物価水準は日本より心持ち安い程度という感じですが、米、肉、果物はかなり割安感があります。

個人的に一番不自由に感じているのは日本の本です。これとても紀伊国屋書店が5店あり内容的には問題ないのですが価格が日本の2~3倍であり、気軽に買うという訳にはいきません。

(学校について)

赴任前の大きな心配の一つは子供の教育でした。ヤシの葉の屋根の学校でのんびり3年間を過ごしたら日本に帰ってからが心配。。。というのは大きな間違いで、日本人学校は小学校1820人、中学校640人と世界最大、昨年9月に我が家の子供と一緒に転入した人数が140人など想像を超える規模です。小学校は施設が手一杯で第2小学校の計画も持ち上がっています。生徒はほとんどみんな転校生なので転入生に対する受け入れもスムーズで全く問題がありません。とはいっても、学校の裏庭に体長2m近いブラックコブラや野生の猿が出るなど熱帯の学校らしいところはあります。

こちらの生活については、改めてもう少し詳しく御紹介してみたいと思います。



(フードセンター：ホーカーセンターともいいます)

～シンガポール便り～

Vol.7

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



早いものでもう年度が終わろうとしています。昨年春の人事異動から事務所の開設準備に取りかかって以来、赴任、事務所開設、あいさつ回り、ひろしまフェア等々と夢中で過ごしてきた1年でした。周囲の人々にも恵まれ外国での仕事という違和感はあまりないものの、天頂にかかるオリオン座や南天に輝く南十字星を眺めていると、異国に来ているのだという実感がわいてきます。

(今年度の仕事について)

経済交流事業については、広島企業への現地企業の紹介、経済団体等の企業視察の斡旋、当地の企業からの引合情報の提供、市場調査などのほか、当地経済団体との交流等を進めてきましたが、まだ種蒔きの段階といったところです。この他にも、「ひろしまフェア」などのイベント、シンガポール政府との技術協力協議、日本語教育図書の寄贈を契機とする当地の技術専門学校との交流事業、数多く訪れる訪問団（33件309人）の訪問先の設定、対応など、いろいろな事業が動きだしています。

(幅広い交流事業を)

当地の人に広島はもうすっかり復興しているのかと聞かれるなど、広島の今の姿はまだまだ知られていません。もっと多くの人々に今の広島を知ってもらい、交流を進めていきたいと思っています。シンガポールのリー・クアンユー前首相も、ビジネスマンと観光客だけでない幅広い交流を言っており、それができるのは「地方」であると思います。それも単なる人々の行き来の増加というだけでなく、学生の技術研修など双方の将来につながる交流を促進していきたいと考えています。

(交流に当たって)

交流に当たってはまず相手の国を知ることが出発点となります。東南アジア各国とも国内に複数民族を抱え、その中で国家としての統一性を確保し発展を実現しようと努めています。そのためには、容教異質なものの許容と、風俗習慣、要望の違いを超えて理解し協力し合おうとする日常生活レベルからの意識づくりが必要とされており、それは広島がこれから世界と直接結びつき交流していく上で学ばなければならない点でもあると思います。こちらで暮らしてみて、中国系、マレー系、インド系、



（シンガポールポリテクニック校への図書寄贈）

～シンガポール便り～

欧米系などの人々に毎日会っていると、日常生活の範囲内にあるいは視野の中に日本人しかいないという状況がいかに特殊な世界であるかを感じます。異質なものを排除したり自分の価値観を押し付けたりすることなく対等に話をしていくためには、寛容や尊重といったものが必要であり、そのためには意識的な努力と経験の蓄積が必要です。相手を知らなければ知らないほど、相手を自分とは異なる得体の知れないものと感じたり、単純化した一面的理解をしたりしてしまいます。それぞれの国の色々な断面を理解しながら柔軟な姿勢で相互理解を進めていくことが重要だと思います。異質なものを受け入れるという点では、県の組織自体も、新しい試みへの取り組みの評価、対応などまず変わるべき点が多いような感じも強くします。

(相手の国を見る目)

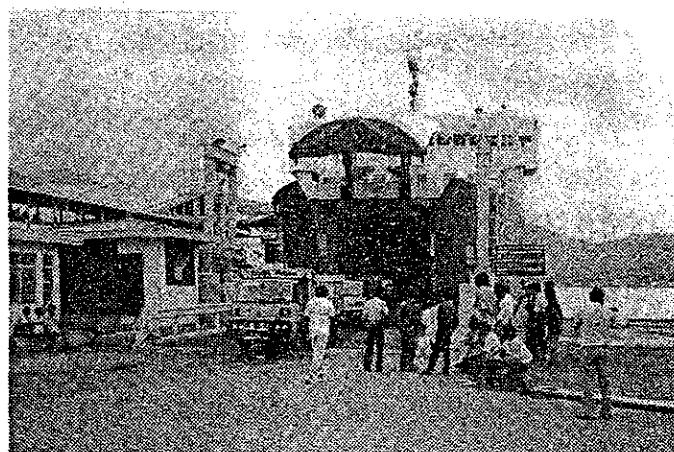
先日インドネシアのスマトラ島へジャカルタから車とフェリーボートを乗り継いで行きました。首都ジャカルタ周辺の喧騒しか知らなかっただ私には、インドネシアの田舎の美しく豊かな街並みや田園風景は大きな驚きでした。一人当たりGNPといった数字を見ているだけでは分からぬ側面を知ることができたと思います。

経済発展の状況が異なると、相手の国や人々の実際の姿を理解することは難しいものです。シンガポールですら、来訪者の中には来る前から自分なりの東南アジアのイメージを作り上げてしまっていて、そのイメージに合ったところだけをみて、やっぱり貧しい国だとかきたない国だとかいった印象を持って帰ってしまう人がいます。肩の力を抜いて対等に理解し合えるようになるまでには、まだまだ経験の蓄積が必要なようです。

(言葉について)

シンガポールでは英語さえできれば日常生活にも不自由はありませんし、マレーシアでもかなり英語が通じますが、他の国ではそうはいきません。インドネシアにおいては、タクシーの料金交渉程度はなんとかなるものの、一般的には英語はほとんど通じず不自由な思いをしました。その国の人々とのコミュニケーションを図ろうとするためには、やはり言葉の勉強が大切と改めて感じた次第です。

今回のスマトラ島は、アメリカ駐在8年に引き続きインドネシア駐在6年という脚佐竹製作所の駐在員の方の出張に同行をお願いしたのですが、この方は努力してインドネシア語を身につけておられ、当地の人々にすっかり溶けこんでいらっしゃいました。また幅広いご経験と暖かい人柄からのお話は学ぶことが多くあり、このように多くの魅力ある人々とお会いできることも海外駐在勤務の良さではないかと思います。



(ジャワ島からスマトラ島へのフェリーボート)

～シンガポール便り～

Vol. 8

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



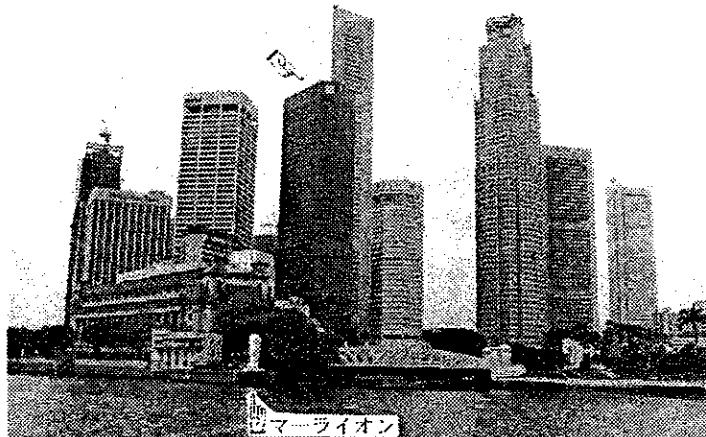
新年度が始まり、慌ただしくまた新鮮な空気に包まれているのではないかと思います。

当地では、政府の予算年度は4月～3月であるものの学校は1月～12月であり、桜の花もなく新緑萌ゆる季節という雰囲気もない淡々とした春？です。

ただし、当シンガポール広島事務所は、市内への移転が決まり事務所の車も買えることとなって、やっと一人前の事務所としての体裁が整い新たな出発点に立った気分です。

(県の国際化)

昨年8月の事務所開設以来の8か月間を振り返ってみると、広島と東南アジアとの交流が予想を上回るスピードで進んでいることを感じます。これは、この間の当事務所への広島からの来客が33件307人という数にのぼることからもうかがわれますし、その内容の幅広さからも感じられます。特に県職員が数多くまた幅広く海外に出るようになっていて驚いています。海外との交流は、異なる環境下において仕事のやり方や



スマーティオン

(シンガポール広島事務所の移転先ビル)

能力が問われますし、異なる組織のあり方を学ぶという点でも、県の仕事についてのよい見直しの機会となるのではないでしょうか。

(シンガポール政府)

広島市よりも2割程度小さい面積に広島県程度の人口が住んでいるいわば広島国といった規模のこの国が、外交、国防、内政の全てを自ら行い、しかも世界の中で大きな存在感を持っています。この国の政府機関と付き合ってみて感じるのは、どの組織も驚くほど小人数で構成されていることと幹部職員が若いということです。リークアンユー前首相から引き継いだ50歳のゴーチョクトン首相を筆頭に30代40代の大半がならび、若い職員が責任あるポストに数多くついています。欧米風の組織運営で個人の権限と責任とが大きいということもあって、今までに知り合った政府職員には若くとも責任を持って積極的に仕事に取り組んでいると感じさせられる魅力ある人が多かったと思います。

(シンガポール政府の公務員と予算)

シンガポール政府の公務員の数は約6万5千人（国軍を除く。政府関係機関等を含めると約10万人）です。教育省が2万5千人、警察を含む内務省が1万4千人、保健省が8

—シンガポール便り—

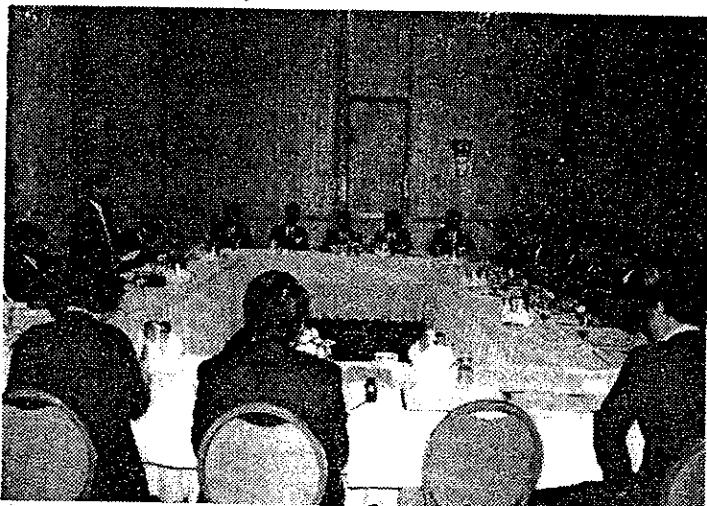
千人などとなっています。ちなみに、広島県内の公務員数は、県、市町村合わせて約7万1千人のことです。

1992年度の政府予算総額は170億シンガポール（約1兆4千億円）で、教育・環境・住宅などが59億ドル、国防・警察など安全保障関係が49億ドル、インフラ整備・経済発展関係に23億ドルなどとなっています。この国の予算で特徴的なことは、歳出において経常経費と開発予算とが分けられていることと社会保障費の比重が相対的に低いことです。全体として開発志向型の予算といえるかと思います。

(経済団体の交流)

昨年度末には企業グループの視察団や経済団体の訪問が続きました。このうちの商工会青年部連合会の一行は、当地の青年実業家との交流の場を持ちたいとのことで、シンガポール中小企業協会(ASME)

の幹部とのミーティングと昼食会をセットしました。組織背景の異なる二つの組織の交流ということで若干心配していましたが、割合に和やかに進んだと思います。ただ第1回目の交流とすることもあって大きいテーマや具体的なテーマが入り交じってポイントが絞りきれなかったのも事実です。海外との交流は、社会経済環境を異にする人々に自分自身をどう説明しアピールし、また相手をどう理解するかということであり、共通の認識



(ASMEと広島県商工会青年部との交流会)

の下に共同して何かを作り上げていくためにはまだ経験の蓄積が必要なようです。

いずれにしてもこのような過程においてもそれぞれ学ぶことは多い訳で、今後交流機会の増加を期待したいと思います。

《シンガポール生活ひとつくちメモ》～暑さについて～

今回からしばらくシンガポールの生活について毎回簡単に紹介してみたいと思います。北緯1度、赤道直下のシンガポールということでまず暑さについてです。3月末には気温34.7℃を記録するなど相変わらずの暑さが続いています。日本の真夏がずっと続いているという感じです。家の中でも汗をかき、外では照りつける太陽を感じ、長時間屋外にいようという気にはなりません。夜寝る際も、12月頃の雨期のシーズンに一時期夏布団が欲しい時期があった以外はタオルケット一枚で十分です。熱帯にいるのですから毎晩熱帯夜ということになるのかもしれません、年中汗をかきながら寝ています。

もっとも、仕事ではクーラーの効いたビルや車の中にいることが多いので暑さを直接感じる機会はさほどありません。服装も、長袖シャツが正装と見なされている事もあって通常は長袖シャツにノータイです。また、家族で買物などにでかける際には、冷房の効きすぎ対策としてむしろカーディガンなどの用意が必要です。

～シンガポール便り～

Vol. 9

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



長かったゴールデンウィークも終わって…、というのは日本の話。当地ではこの期間5月1日がレーバーデイで休みとなっているだけです。多民族国家らしく各民族、各宗教に配慮したものとなっていて興味深いので御紹介してみたいと思います。

(中国正月)

まず、唯一2日連続の休みとなっているのが中国正月（旧暦の正月）。工場などはほとんど1週間休みとなり、マレーシアなどから働きにきている人々はふるさとに帰ります。1月1日も休みなのですが淡々とした年越しであり盛り上がりません。国民の78%を占める中国系の人々にとってはやはり中国正月の方が本番という感じです。

正月が近づくとチャイナタウンは正月準備の買物客でごったがえし、威勢の良い物売りの声が飛び交います。近くの大通りはライトアップされ、道ゆく人々もなんとはなくそわそわした感じで、日本の年末と同じような雰囲気です。都心の広場には、小さな仮設の観覧車やジェットコースター、メリーゴーランドなどの乗り物や射的屋、福引屋などが集まった臨時の遊園地ができて賑わいます。

お正月には、日本のお年玉と同じようなアンバオ（紅包）の習慣があります。日本と異なるのは、結婚していなければいくつになってももらえることと、職場などでも出すというような点でしょうか。金額は偶数が良いとされており、そのためにシンガポールでは2ドル紙幣が発行されているといわれているほどです。

(イスラム教のお祭り)

各宗教のお祭りもそれぞれ休日となっています。まずイスラム教では、断食明けのお祭りであるハリラヤプアサと巡礼のお祭りであるハリラヤハジの2日です。ハリラヤプアサはその前の1か月前の断食の月（ラマダン）が明けたことを祝う日。ラマダンについてはその実際に触れるることは少なく、この期間中マレーシアへ出張した際にマレー料理の店が昼間ガランとしていたのが印象に残っている程度です。3月の終わり頃から祭りの中心となるゲイランロードはライトアップされ仮設の店が並びます。中国正月で見られた仮設の遊園地が今度はこちらに越してきて営業しています。公団アパートのマレー系の人の家で



〈買物客で賑わうチャイナタウンの裏通り〉

—シンガポール便り—

は窓の外にクリスマスツリーにつけるような電球を取り付けて飾り立てており、20階建て程度の大きな建物のあちこちに思い思いの色と形で飾り付けられた明かりがチカチカしているのはなかなか壮观です。マレー系の人の比率が高いある団地などは「シンガポールのラスベガス」と呼ばれています（？）

(その他の宗教のお祭り)

ヒンズー教のお祭りについては、1月号でも触れた光の祭りと呼ばれるディーババリが休日となっています。このディーババリではリトルインディアのセラングーンロードがライトアップされます。余談ですが、この国は全域で電線等が地中化されているため通りに電信柱や電線等がなく、また野外広告物が厳しく規制されているために通りの風景が極めてすっきりとしています。ライトアップは、通りの上に交互に電線を渡して豆電球をぶら下げる訳ですが、電柱がないのでそのためにわざわざ柱を建てたりしています。

キリスト教のお祭りとしては復活祭前の金曜日であるグッドフライデーとクリスマスが、仏教のお祭りとしては釈迦生誕際であるベサックディがそれぞれ休日となっています。
(この他の休み)

この他に5月1日のレイバーデイと8月9日の独立記念日（ナショナルデイ）とを合わせて年間11日となります。

このうち、毎年日にちが決まっているのは新年とレイバーデイ、ナショナルデイ、クリスマスの4日だけで、その他の休日はそれぞれの暦などによっているため毎年時期がれます。

ナショナルデイは、多民族国家であるこの国にとって国民の気持ちを一つにするための大切な行事であり、この日に行われるナショナルデイパレードは国的一大行事です。パレードといっても街をね

り歩く訳ではなく、国立競技場を使って行われるマスゲームなどを盛り込んだ大変に大がかりなイベントです。国民の多くはこのイベントを楽しみにまた誇りにしており、ナショナルデイの前日に赴任したために赴任後しばらくは「ナショナルデイパレードを見ましたか？」が挨拶がわりのようでした。

----- (今年のカレンダーから) -----

1月 1日	ニューイヤーズデイ
2月 4, 5日	チャイニーズニューイヤー
4月 5日	ハリラヤプアサ
4月 17日	グッドフライデー
5月 1日	レイバーデイ
5月 17日	ベサックディ
6月 11日	ハリラヤハジ
8月 9日	ナショナルデイ
10月 24日	デジーバカリ
12月 25日	クリスマス

《シンガポール生活ひとくちメモ》～救急車と消防車～

当地ではパトロールカーは日本と異なり白一色にPOLICEの文字で赤と青のランプですが、救急車と消防車は日本と同じ白色と赤色に赤ランプです。ただ異なるのは通常はサイレンを鳴らさずに赤ランプだけ点滅させながら走っていること。中にはサイレンを鳴らしながら走っているのがあるので不思議に思って地元の人聞いてみると、急ぐときだけ鳴らすんだとのこと。意外な感じがしました。もう一つ意外なのが赤信号で止まること。小さい国だから信号を待つ時間くらい問題じゃないのかも知れませんが、赤ランプを点滅させながら信号で止まっている消防車を見たときにはさすがに驚きました。

～シンガポール便り～

Vol.10

シンガポール広島事務所長 橋本 康男



夏至が近づいて日が長くなってきたことだと思いますが、ここシンガポールでは一年中暗いうちに起きなければなりません。シンガポールは東経103度で、東経132度にある広島県とは経度で約30度西にあります。したがって太陽の昇るのが日本より2時間遅いのですが時差は1時間です。つまり感覚的には毎日1時間早起きをしている感じです。また、北緯1度とほぼ赤道直下に位置しているために、日本ではできない経験、すなわち北に昇る太陽を眺めることができます。

■被占領50周年

国立博物館で1月末から開かれていた占領時期紹介展が5月末に終わりました。これは今年の2月15日が第二次世界大戦時に日本に占領されて50周年に当たるのを機に開催されたもので、若い世代を含めて沢山の人々を集めました。この占領時期には数千といわれる中国系住民が抗日華僑として日本軍により殺されたといわれており、その慰靈碑が街の中心部に建てられています。2月には占領時期の日本軍の残虐行為を紹介するドラマが英語版、中国語版でそれぞれ放送され、赤ん坊まで殺すシーンなど悲惨な記憶を新たにさせました。また、日本軍占領時期についての多くの出版物が書店の店頭に積まれています。



これら一連の記念行事などは、決して反日感情を煽ろうとするものではなく、悲惨な歴史を事実として語り継いでいくというもののようです。新聞の読者の投稿欄に載った「忘ることはできないが許すことはできるのではないか。」というのが今のシンガポールの姿勢を示しているように思います。私自身、事前調査でシンガポールを訪れた際に、タクシーの運転手さんから乗っている間中占領時期の日本軍の残虐行為について聞かされたことがありますし、占領時期の話を読んだり聞いたりすることもありますが、日常的には反日感情を感じることはほとんどありません。ましてや観光旅行で来られる場合にはそのような重さを感じることなく過ごされるでしょうが、過去の事実についての無知やひとりよがりの正当化から驕慢な印象を与えることのないような配慮も必要ではないでしょうか。親しくなったシンガポーリアンとこの件について話している時に言われた、「日本人はショートメモリーだから。」という皮肉を込めた言葉に対する答えが必要な気がしています。過去の事実を理解した上でその反省の下に将来へ向かってよりよい関係を築きあげることが求められていると思います。

～シンガポール便り～

■非常事態宣言下のバンコク■

5月に非常事態宣言下のバンコクに4日間行ってきました。

もちろん、わざわざこの時期を選んで行った訳ではなく、出張日がたまたま非常事態宣言発令日に当たってしまったのです。少し前から雲行きがおかしいとは思っていましたし、出発直前には当日早朝に非常事態宣言が発令されたことは他県のバンコク駐在員から情報が入ったのですが、前後のスケジュールが詰まっており前回のクーデターの時も街自体は平穏だったと聞いていましたのでとにかく行ってみることにしました。

バンコクへの飛行機はほぼ満席でしたし、空港からホテルまでも特に変わった感じはありませんでした。今回の出張は、タイに進出している広島県企業の4工場と2事務所の訪問が目的であり、4工場についてはいずれもバンコク郊外にあり平常どおり操業していたので予定どおり訪問できましたが、2事務所についてはバンコク市内にあり安全確保のために事務所を閉鎖していたため訪問できませんでした。宿泊していたホテルが幸い市内の紛争地域とは離れた地域にあったので滞在中特に身の危険を感じることもなく市民生活も平穏に見え、あえていえば軍の装甲車が道路を塞ぎ自動小銃を持った兵士が郊外からバンコクに入ってくるバスを検問していたのが印象に残った程度でした。ただ、日本人駐在員の方の話によると、スーパーが軒並み閉めてしまっているので食料の確保が問題になりつつあるとのことでした。日本企業の急激な進出にしたがってタイでも多くの日本人が働いておられます、製造業の場合、日本人1人で従業員100人以上の工場を運営している例もあり、慣れない地でのご苦労が多い中で頑張っておられるのを見ると、折角のこのようつながりと経験を地域同志のより幅の広い交流に結びつけていかなければと思います。ところで当地の方の話によると、今回の事件は従来のような一部の者による権力争いというのではなく広く民衆を巻き込んだものという点で異なり、それが騒ぎが大きくなった理由だとのことです。経済発展の過程においては、ある時期強権的な経済社会運営による資本蓄積が必要とも言われますが、経済発展が急速に進み現実に豊かさへの道を歩みだしたタイにおいて、民主化へのソフトランディングをどのように実現していくのかという点で、このような動きが今後どのような展開をしていくか興味あるところです。

《シンガポール生活ひとくちメモ》～バス停と道路名～

当地に来て驚いたことの一つは、バス停に名前がないことです。外の景色を見ていて降りるところを判断する訳です。当地の人に不便じゃないかと聞いてみると、何千もあるバス停にそれぞれ名前を付けるなんて大変じゃないかとのこと。ところが、道路には袋小路にいたるまで全て名前が付けられており、大変だという点ではこちらの方こそ大変なよう気がするのですが習慣の違いとしか言いようがないのでしょうか。



〈非常事態宣言2日目のタイの新聞〉